九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学の求める人物像とは

玉田，薫
九州大学先導物質化学研究所

https://doi.org/10.15017/1912795

出版情報：基幹教育紀要. 4, pp.1-2, 2018-03-23. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学の求める人物像とは

玉田　薫

副理事，　九州大学先導物質化学研究所，〒819-0395 福岡市西区元岡 744

A person sought in Kyushu University

Kaoru TAMADA

Institute for Materials Chemistry and Engineering, 744 Motooka, Nishiku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail: tamada@ms.ifoc.kyushu-u.ac.jp

卓越大学院プログラムの申請にあたり、まずは九州大学の目指す人材像を明らかにしてほしいとの要請があった。組織ありきではなく、教員ありきでもなく、どんな学生を育て社会に出したいと思うのか、それが問われている。しかし「人材（human resources）」という言葉には管理者側の思惑がすでに含まれていて、大学という高等教育機関がこれを使うことに僅かながら違和感がある。組織にとって役に立つ人材、社会に役立つ人材、英語が話せる人材、グローバル社会で力を発揮する人材。大学は企業の予備校ではないし、企業側も果たして大学に専門学校のような実学教育を求めているとも思われない。大学は人間を育てる場であり、学生はここで人間としての完成を目指すのである。卒業し、社会に出て、長い人生を生き抜き、自分の夢を実現するために必要なエネルギーを蓄え、どんな荒波にも耐えられる人間の尊厳のようなものを大学で身につけるのだと考えたい。

例えば、誰も坂本龍馬を「優れた人材」とは言わない。彼は「優れた人物」なのである。「人材」の枠からはみ出た人物を育てる。本当の人間を育てる。私が九州大学に期待する教育はそこにある。そして実際、九州大学にはそのような優れた人物を輩出してきた歴史があるはずであると思う。

私はこの九州の地とは全く所縁のない東北の小さな村で生まれ育った。その後日本中そして世界中を旅して、６年ほど前に九州大学に辿り着いた。まるで外国のように「外」の目で九州大学をみて、期待している人物像というのが大きく２つある。一つは「野武士」のような逞しさを持つ人物である。自分の信念を強く持ち、愚直にも自分の道をまっすぐに突き進む、そういった人物である。これは前職の東北大学において抱いた期待とも共通する。日本の社会にとって重要なこうした人物は、歴史的に北と南の地から輩出されてきたのではないのか。九州大学はそういった人物を、日本そして世界のために育てる責任を負っているような気がしてならない。もう一つは日本の中のアジアとしての福岡（博多）の土地からくる「外に開かれた気質」である。これまで触れたことのないような全く新しい文化に出会っても、臆せずに受け入れ、自分の中に即座に取り込む、そんなおおらかさや器の大きさを持ち合わせた人物である。「逞しさ」と「柔軟さ」の２つの魅力を兼ね備え

Bulletin of KIKAN Education, Vol. 4, 2018
© 2018 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

た人物が、ここ九州大学から世界に向けて羽ばたいていく姿を想像してほしい。多少英語が苦手でも、数学が苦手でも、その学生は世界を変える可能性を秘めているのではないか。夢の大きさでその人間の世界観がわかるという。夢は知識や学力の延長上にはない。想像力がないと正しい夢を見ることは難しいそうである。九州大学の学生には、是非宇宙にまで広がる大きな想像力を育ててほしいと思う。

続いて、現在取り組んでいるダイバーシティー推進事業について少し述べたい。九州大学では総長の強いリーダーシップのもと、男女共同参画室を中心にダイバーシティー推進事業を積極的に進めている。性別、国籍、年齢、障害の有無などの「違い」を持つ人間が協力して、ともに考え、ともに働くことで、人類にとってより優れた社会を作り上げようという思想がダイバーシティーである。日本の社会はこれまで圧倒的に（日本人）男性を中心に作り上げられてきた。しかし、そのために大事な何かを見落としてしまっている可能性がある。今よりもう一段階進んだ「未来型の社会」を作り出すためには、改革の過程でこれまでとは違った考え方を取り入れることは重要で、女性や外国人の目線は、日本を新たな方向へと導く鍵になるかもしれない。

ダイバーシティーは支援事業と捉えられがちであるが、実はその本質は「支援」ではない。異なる背景を持つ人たちの「共存・共生」である。しかし、一方で、女性や外国人、障害を持つ人が働きやすい職場を作る努力は、社会の中に多様性を取り入れるためにどうしても必要不可欠なものである。「支援」を未来への「投資」として捉え、ともに協力できる環境作りにぜひ社会全体で取り組みたいものだと思う。

この紀行を執筆するにあたり、基幹教育院の Web ページを確認した。基幹教育の成長モデルに素晴らしい言葉が書かれてあった。「**何が正解であるかは視点によって異なる**」。まさにその通りである。この考えが身についたならばダイバーシティー教育はもはや完成したと言って良いだろう。さらには、「つまずきや失敗は、新たな知や学びの起源である」「学問による真理探究の世界と矛盾に溢れた現実社会との間を往還する思考を重ねることで、社会に役立つ知や技能が生まれる」など、大人になってやっと理解できた事柄が書かれてあった。確かに、現実社会は矛盾に溢れている。そしてこの矛盾こそが社会の本質であると思う。それに屈せず立ち向かえる人物が求められる。

社会や組織が大きく変動しているのは現代に限ったことではない。いつの時代も時とともに予想を越えることが繰り返し起こっては歴史が書き換えられる。時代を牽引する人物は、２つ以上の価値観の異なる時代をまたいで活躍できた人物なのではないかと思う。一つの時代が終わり、一度学んだことが無と化し、それでも自分らしさを失わず、信念を持って新たな時代を生き抜いていく。これから我々が向き合うのは、国境のない世界かもしれないし、AI と共存する世界かもしれない。しかしいずれにせよ、一人の人間として、これからの時代を強く生き抜いていける人物の輩出に、ここ九州で関われたのであれば幸いである。